

## 進化する同期会

東かがわ市立大川中学校 松浦 隆夫  
(歴史学研究室 昭60年3月卒)

在学当時、すべての研究室の中でも最も小さい研究室の一つが「歴研」こと歴史学研究室だった。卒業の同期は7人。専攻はそれぞれ、日本近世史、中世史、東洋史、西洋史、考古学などと分かれていたがいつも和気あいあいとしていた。社会人になってからも、一年目から毎年のように同期会が開かれた。折しもテレビドラマでは「男女7人夏物語」がヒットしていたが、我々同期会の男女のバランスもその設定と全く同じだった。残念ながら明石家さんまさんと大竹しのぶさんのような恋物語は生まれなかったものの、絶妙の人間関係で我々の同期会は現在も続いている。ある時、メンバーの一人がぼつりと言った。

「私たちが卒業した年の更に40年前は、日本はまだ戦争していたのよね。」

戦後激動の40年と我々が大学を卒業してから現在までの尺がほぼ同じという信じ難い事実には啞然とした。しかし、そこにはそれぞれが不器用にも懸命に生きてきた我々のドラマが確かに存在する。この歳になってはじめて実感できる歴史の時間感覚である。

そんな同期会が最近進化してきた。

その一つは、SNSで仲間がつながったということ。誰かが一言つぶやくと、すぐさま応答が続く。みんな暇ではないと思うけれどにぎやかな通知音が鳴り止まない。絵文字も若者に負けないほどゴージャスでカラフルだ。とても還暦前のやりとりとは思えない。意外と楽しい。落ち込んでいるときでも、この仲間の「いいね」があれば、それでいいのかもしれないと思うことがある。ひとしきりやりとりが続くと、しばらくして、みんなまた日常の忙しさにもどっていく。さすが引き際をわきまえている大人のSNSだなと感心する。

もう一つの進化は、ふるさとの歴史探訪の旅企画が始まったこと。この歴史探訪は、まずはメンバーの赴任先の学校訪問から始まる。在籍児童が一人という離島の学校にもおじゃました。同じ香川県でありながら別世界だった。どこへ出かけても発見の連続だった。持ち回りで担当となるツアーコンダクターは、校区内の観光ポイントと、とっておきの歴史秘話と、隠れ家的な料理店も予約しておかなければならない。結構たいへんだ。しかし、用意しておいた解説に深く頷いてくれる仲間の顔を見て、なぜか自慢気である自分に気付く。恩師の丹羽佑一先生が「ふるさとを愛する心を育てたいなら、自分の言葉でふるさとの歴史を語らせよ。」と云っておられたことを思い出す。

我が松楠会、そして歴研同期会は、今後も時代と共に進化していくだろう。どんな形になっていくのかとても楽しみである。